



THE PARABLE OF THE TWO HOUSES

岩の上の家と砂の上の家

――崩れない人生を築くために

二人の男が、家を建てていた。二人とも似たような家を建てようとしていたのだが、一人は岩山を登り、地盤のしっかりした場所を選んだ。重たい建材を上まで運ぶのは容易ではなく、硬い地面に土台を築くのに時間もかかるが、せっせと仕事に取り組んでいた。もう一人は、砂の低地に家を建てることにした。物事は簡単に進み、岩山の家のほうがまだ土台作りをしている間に、家は完成した。見たところ、素敵で住み心地の良さそうな家だった。

周りの者たちから、こんな言葉が出始めた。「岩山のほうは、いつになったら、家が建つんだろうね・・・」「ほら、もう一軒の家はとっくに出来上がっているのに、こちらの家はまだ柱も立っていない。」しかし、その人はひるまなかつた。自分のしていることをよく承知しており、確信があったからだ。この場所に、この方法で家を建てるならば、堅固な良い家が建つと。

さて、秋も半ばに差し掛かると、岩山の家も無事完成した。どちらも、なかなかの家だ。建材も様式も同じで、似たような雰囲気の家だった。この頃には、もう人々のうわさもなくなって、男たちと家族はそれぞれ新しい家で幸せに暮らしていた。

その内、冬がやってきた。ところが、その冬の天候は例年とは違っていた。いつもだと、寒さが厳しくなっても雪がちらつく程度だったが、この冬には、まるで台風のような嵐が吹き荒れ、大雨が何度も降って洪水まで発生した。異常気象と

しか言えない状況だった。

その結果、たくさんの家が被害を受けた。被害を受けた家の大半は、砂地など地盤の弱い場所に建てられた家だった。それらの家は土台からすっかり傾き、家自体も崩れてしまった。一方、地盤の固いところに建てられた家は、窓ガラスが割れるとか、屋根の一部がはがれるなどの被害はあったものの、家自体はしっかりと立ったままであった。

さて、この話は聖書にあるイエスのたとえ話を脚色したものです。イエスはこのたとえで、私たちの人生について語っています。人生とは家を建てるようなもので、材料やスタイルも大切ですが、まず最初に堅固な良き土台の上に建てないなら、どんなに素敵な家を建てても、「人生の嵐」に耐え抜くことができず、崩れてしまいます。

これからの時代、人生の嵐はますます厳しくなり得ます。今の社会情勢や経済状況、

地球環境を見て多くの専門家が予測しているように、私たちは、「例年の冬の寒さ」、つまり誰の人生にも付き物の通常の試練を超えて、大きな危機的状況に遭遇する可能性が高くなっているのです。そのことは、何千年も前から聖書の中で予言されていました。

このような時代にあって、神は、私たちが嵐の中にあっても心に平安を持ち、神の恵みによって守られるように望んでいます。そして、心の平安や神の恵みを豊かに受けるためには、まずしっかりした土台の上に人生を築くことが必要です。

それでは、何を人生の土台にしたらいいのでしょうか。聖書のたとえに出てくる「岩」とは、何を意味するのでしょうか。その答えは聖書の中にあります。神はもともと、人が良い人生を築けるようにと「一つの石」を与えられました。土台とするための、強くてしっかりした石をくれたのです。

聖書にこう書かれています。「このイエスこそは『あなたがた家造りに捨てられたが、隅のかしら石となった石』なのである。この人による以外に救はない。わたしたちを救うる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである」。(使徒行伝 4:11,12)

つまり、イエスこそ「土台石」なのです。「家造りに捨てられた」とありますが、それは、神が最初にイエスを送ったユダヤの国では、イエスを受け入れる人もいましたが、拒む人もおり、イエスは結局、彼を拒む人たちの手で十字架にかけられて死

だのでした。それでも弟子たちは、「全世界に福音を宣べ伝えよ」というイエスの命を受けて、他の地域に出で行き神の愛のメッセージを伝えました。その結果、福音は全世界に広まり、こうして、ある人たちには「捨てられた石」が、別の人たちにとっては「隅のかしら石」、つまり、信仰の土台となったわけです。

さて、「信仰」と聞くと、何かつかみどころがなく実体のないものを盲目的に信じることだと感じる人もいるかもしれませんが、そうではありません。信仰は、聖書にある真実を知ることによって成長するもので、人生に欠かせない要素です。

そのことについて、ある人はこんなふうに言いました。「信仰のない人生は、ガソリンのない車のようなもの。下り坂なら進むが、登り坂だとほとんど進まない。」考えてみると、2000年前、キリストの誕生と共に、イエス・キリストの教えによって、武力が支配する残虐な世界に愛と信仰と秩序がもたらされましたが、信じる心、信仰が失われていくにつれて、世の中のモラルや人間性も下り坂になっています。「金銭を失う者は多くを失う。一人の友を失う者は、もっと多くのものを失う。しかし、信仰を失う者はすべてを失う。」という言葉がありますが、まさにそれが起きているのかもしれませんが。

しかし、逆を考えると、信仰があるなら、結局はすべてを持つということ。まさに、「信仰とは天国の通貨であり、神の祝福を引きおろす力である」という言葉の通りです。これとは

対照的に、この世の通貨は、まさに当てにならない砂の土台の上に建てられていると言えるでしょう。最近の金融危機はそのことを物語っています。

ある意味では、誰もが「何らかの信仰」を持って生きています。要は、何に信仰を持っているかということです。お金、品物、あるいは、名誉や地位に信仰を持って生きる人もいれば、特定のリーダーに対して信仰を抱いている人もいます。しかし、そのどれも決して永遠に続くほどの確固としたものではなく、どこかに弱さや欠点があります。だからこそ、真の土台、つまり神の愛とイエスの教えの上に信仰を築く必要があるのです。

神は、人がしっかりした人生を築けるようにとイエスという「土台石」を送って下さいました。もちろん、その石をどうするかは各自の選択で、神でさえも強制はされません。しかし神が気にかけておられるのは、私たち一人一人の魂の救いと幸せです。だから、ぜひ岩なるイエスを土台として家を建てて下さい。

自然界においてすべての生き物に天敵がいるように、私たちの人生にも天敵がいます。そして、人間にとっての天敵は悪魔です。悪魔は人の魂を執拗に狙っており、破壊へと導きます。そこで神は、その天敵から人間を守り、安全に幸せに暮らせるようにと、御自分のひとり子イエスを地上に送られ、救い主とされたのです。

海の中の小さな熱帯魚の群れを思い浮かべてみて下さい。小魚たちは広い海

では無力な存在です。しかし、岩場を隠れ家とする彼らは、どんなに大きな魚がやってきても、あるいは荒れ狂う嵐がやってきても、岩の陰に身を潜めることで身を守ります。おおしけの時でも、岩のくぼみには常に「穏やかな場所」があるのです。そのように、主イエスこそ、私たちの堅固なやぐらであり、逃げ場です。「主の名は堅固なやぐらのようだ、正しい者はその中に走りこんで救を得る。」(箴言18:10)

岩なるイエスと神の保護

神こそわが岩、わが救、わが高きやぐらである。わたしは動かされることはない。わが救とわが誉とは神にある。神はわが力の岩、わが避け所である。民よ、いかなる時にも神に信頼せよ。そのみ前にあなたがたの心を注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。

(聖書 詩篇62:6-8)

いと高き者のもとにある隠れ場に住む人、全能者の陰にやどる人は主に言うであろう、「わが避け所、わが城、わが信頼しまつるわが神」と。主はあなたをかりゅうどのわなと、恐ろしい疫病から助け出されるからである。主はその羽をもって、あなたをおおわれる。あなたはその翼の下に避け所を得るであろう。たとひ千人はあなたのかたわらに倒れ、万人はあなたの右に倒れても、その災はあなたに近づくことはない。これは主があなたのために天使たちに命じて、あなたの歩むすべての道であなたを守らせられるからである。

(詩篇91篇からの抜粋)

